

農村生活体験「出会いが人生の宝物」

農村生活体験とは

子どもたちに一番必要なもの「ありのままの生活と自然」にふれることができる体験です。

体験の種類と考え方

「ありのままの生活と自然」を基本とした体験となりますので、受入民家（団体）や季節・天候、時間によって体験内容が違うことをあらかじめご理解ください。

提供する体験種類と考え方は次のとおりです。

生活体験

例えば、スイカを二つに切る、枝豆をもぎ取る、皿を洗うといった大人にとって当たり前なのが子どもたちにとって貴重な体験となります。

「お手伝いをしなくなった子ども」と言われて久しいですが、世の中が便利になりすぎて子どもに手伝ってもらう仕事なくなったのかもしれませんが、効率性や合理性とは違う「結」の精神に育まれた生活がここにあります。

農業体験

農業体験というと「野菜収穫」という印象がありますが、収穫する前に、腰をかかめての雑草取りや鍬を持つての土寄せなどのお手伝いをしてもらいたいですね。野菜を立派に育てるためには苦勞を惜しまない農家の姿があるのです。親のありがたみは自分が同じ立場になって初めて気づくと同じように、その苦勞を体感しなければ気づくことができない子育てにも似ています。

野菜を目の当たりにして、農家の人たちが汗水を流して育てた努力や安心安全な野菜のありがたさに感謝できる「想像力」をはぐくめる体験です。

自然体験

太陽、そして、地球に海と大気や森がなかったら、命は誕生しません。地球は人間のために海や森や食料を用意してくれていたわけではないため、「人間は自然の中で生かされている」ということができます。コンクリートジャングルには虫がいないのでしょうか。蝶が近くに飛んでくるだけでも拒否反応を示す子がいます。人なり、生物なり、自然界なり、「何かと繋がっていること」と解釈できるキッカケになればと思います。

東日本大震災、新潟・福島豪雨は、人間が自ら作り出したものは自然の脅威と力には無力に等しいことを思い知らされた今だからこそ、自然体験の必要ではないでしょうか。

人とのふれあいが何よりの学び

見ず知らずの土地で、初対面の人と会話を成り立たせることは、子どもたちにとってかけがえのない体験となります。

しかし、心の準備なしで当日を迎えるのは、子どもたちにとって少しかわいそう。よりよい時間を過ごすための活動基準を次のとおり示しますので、事前準備にお役立て下さい。

<活動基準>

自分から進んであいさつできるか

集合や整列がすばやくできるか

自分勝手な行動をしないで、協力して行動できるか

農家の人と進んで話すことができるか

まかされた仕事を最後までしっかりできるか

食事や生活のマナーを守って、礼儀正しく行動できるか

農家の工夫や努力などに対する質問ができるか

自然に親しもうとする姿勢があるか

普段から心がけよう生活マナー

あいさつ

「おはようございます」「こんにちは」「行ってきます」「ただいま」

「ありがとうございます」「さようなら」

「です」「ます」のていねいな言葉づかい

「これはどうするのですか?」「どこへ運びますか?」

失礼 「え～」「やだぁ」「無理」「べつに」

玄関

はきものをそろえる

食事

「いただきます」「おかわりください」「ごちそうさまでした」

「とてもおいしいです」「どうやって作るのですか」

「すみません、これは食べるのが苦手で残してしまいました」

配膳を手伝う、茶碗を持って食べる、箸をきちんと持つ、洗い物手伝う

苦手だったものにも挑戦する

トイレ

スリッパをそろえる、汚したらトイレトペーパーでふき取る

あやまる

失敗したらきちんとあやまる。「こぼしてしまいました。すみません。」

体調が悪くなったら

いつから、どこが、どのように悪いのか伝える